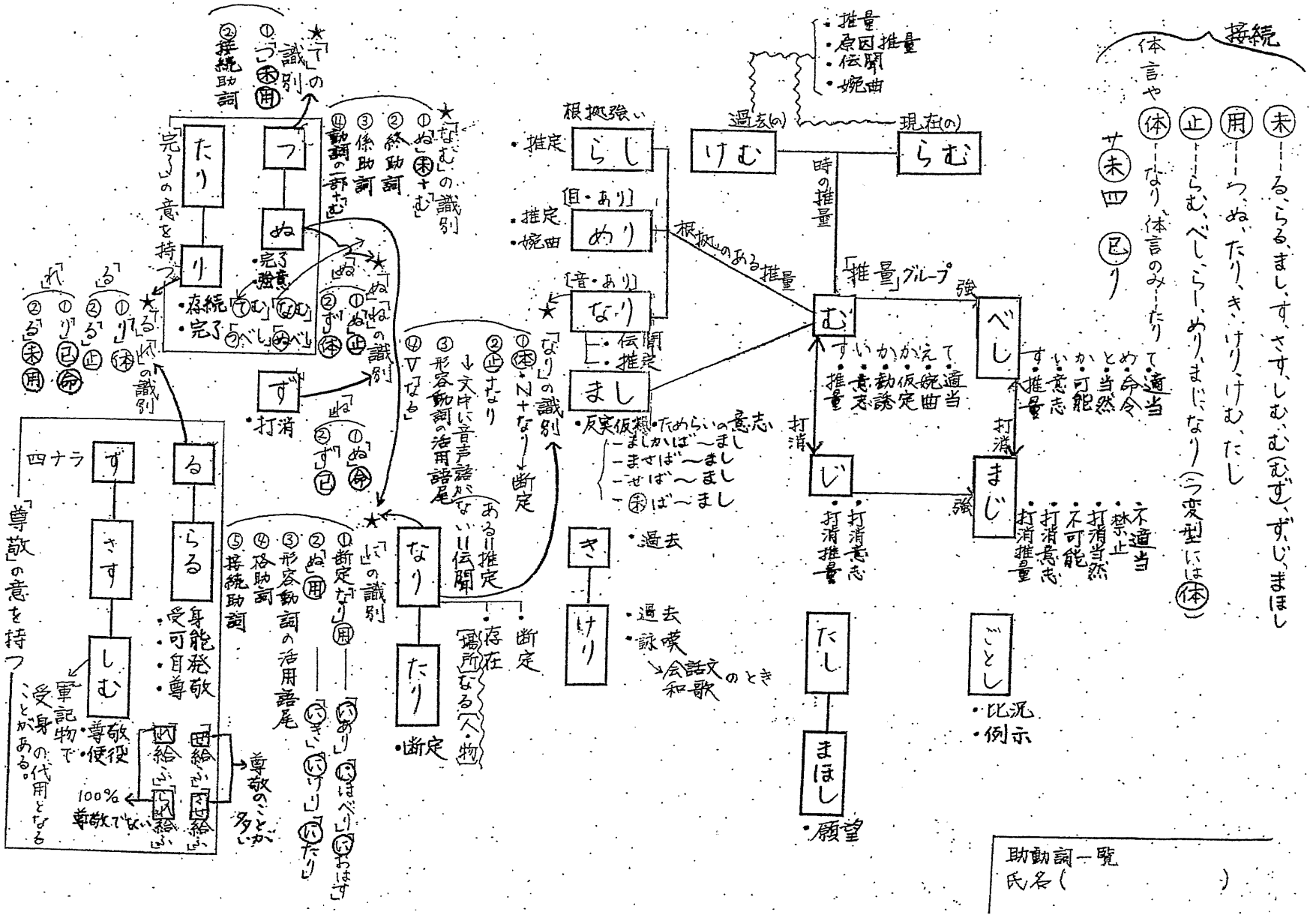
古典文法一〇〇

改訂版

～基礎から演習まで、三年間使えるこの一冊！のはずが改訂版～

（【73】以降の問題を若干差し替えています）

氏名（　　）


接続
体言や体
未 る、らる、まし、す、さす、しむ、む(むず)、ずじ、まほし
用 つ、ぬ、たり、き、けり、けむ、たし
止 らむ、べし、らし、めり、まじ、なり(ラ変型には体)
サ未 四 已 り
なり、体言のみ、たり
推量
原因推量
伝聞
婉曲
過去(の)
現在(の)
けむ
らむ
時の推量
根拠強い
推定
らし
但・あり
推定
婉曲
めり
根拠のある推量
音・あり
なり
伝聞
推定
まし
反実仮想
ためらいの意志
ましかば〜まし
まさば〜まし
せば〜まし
未ば〜まし
「推量」グループ
強
む
すいかかえて
推量
意志
勧誘
仮定
婉曲
適当
べし
す 推量
い 意志
か 可能
か 当然
え 命令
て 適当
打消
じ
打消推量
打消意志
打消
まじ
強
不適当
禁止
打消当然
不可能
打消意志
打消推量
さ
過去
けり
過去
詠嘆
会話文
和歌のとき
たし
まほし
願望
ごとし
比況
例示
断定なり
断定
存在
場所なる人・物
たり
断定
ある=推定
ない=伝聞
形容動詞の活用語尾
文中に音声語がない
断定
形容動詞の活用語尾
格助詞
接続助詞
いあり
いはべり
いはす
いき
いけり
いたり
尊敬のことが多い
100%尊敬でない
給ふ
給ふ
給ふ
給ふ
軍記物で受身の代用となることがある。
尊敬
使役
身能
受可
自尊
飛敬
る
らる
ず
さす
しむ
四ナラ
「尊敬」の意を持つ
完了の意を持つ
存続
完了
強意
たり
り
つ
ぬ
ず
接続助詞
動詞の一部+む
係助詞
終助詞
打消
「て」の識別
「なむ」の識別
「ぬ」の識別
「ぬ」の識別
「なり」の識別
「に」の識別
「る」「れ」の識別

助動詞一覧
氏名(　　)

〈動詞〉

【1】カ行変格活用の動詞を終止形で一つ記せ。

【2】サ行変格活用の動詞を終止形で二つ記せ。

【3】ナ行変格活用の動詞を終止形で二つ記せ。

【4】ラ行変格活用の動詞を終止形で四つ記せ。

【5】　上一段活用の動詞を終止形で九つ記せ。

【6】カ行下一段活用の動詞を終止形で一つ記せ。

（ちょっと説明）

動詞の活用の種類を決定する時は、

①まず、その動詞が【1】〜【6】で出てきた動詞ではないかを考える。

←

②そうでない場合、その後の下に打消の助動詞「ず」を付けてみる。

という手順を取る。

【7】「読む」という動詞の下に「ず」を付けたら、「読まず」となった。活用の種類を答えよ。

【8】「過ぐ」という動詞の下に「ず」を付けたら、「過ぎず」となった。活用の種類を答えよ。

【9】「捨つ」という動詞の下に「ず」を付けたら、「捨てず」となった。活用の種類を答えよ。

【10】次の活用表を完成せよ。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
来								行　活用
す								行　活用
死ぬ								行　活用
往ぬ								行　活用
あり								行　活用
侍り								行　活用
蹴る								行　活用
着る								行　活用
見る								行　活用
行く								行　活用
老ゆ								行　活用
寝								行　活用

【11】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今は昔、比叡の山に児 a(ありけり)。僧たち、宵のつれづれに、

「いざ、かいもちひせむ。」

と言ひけるを、この児、心よせに聞きけり。さりとて、し出ださむを待ちて、寝ざらむも、わろかりなむと思ひて、片方に寄りて、b(寝たるよしにて)、c(出で来るを待ちけるに)、すでに、し出だしたるさまにて、ひしめき合ひたり。

この児、さだめておどろかさむずらむと待ち d(ゐたるに)、僧の、

「もの申しさぶらはむ。おどろかせたまへ。」

と言ふを、うれしとは e(思へ)ども、ただ一度にいらへむも、待ちけるかともぞ思ふとて、いま一声呼ばれていらへむと、念じて寝たるほどに、

「や、な起こしたてまつりそ。幼き人は寝入りたまひにけり。」

と言ふ声の f(し)ければ、あなわびしと思ひて、いま一度、起こせかしと思ひ寝に聞けば、ひしひしとただ食ひに食ふ音のしければ、すべなくて、無期の後に、

「えい。」

といらへたりければ、僧たち、笑ふこと、限りなし。

問　二重傍線部a〜fの動詞について、

（1）活用の行と種類を、例にならって答えよ。

（例）今から一緒に行きます。→カ行五段活用

（2）基本形（終止形）を、例にならってすべてひらがなで答えよ。

（例）今から一緒に行きます。→いく

2	1	
a	e	a
b	f	b
c		c
d		d
e		
f		

〈形容詞・形容動詞〉

【12】「かしこし」はク活用形容詞、「かなし」はシク活用形容詞であるが、ク活用とシク活用の見分け方を説明せよ。

【13】「おろかなり」と「うつつなり」のうち、形容動詞なのはどちらか、理由も含めて説明せよ。

【14】次の活用表を完成せよ。

かしこし								活用
かなし								活用
ねんごろなり								活用
堂々たり								活用

【15】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

京に入り立ちてうれし。家に至りて、門に入るに、月明かければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまして、言ふかひなくぞこぼれ破れたる。家に預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり。中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預かれるなり。さるは、便りごとに、物も絶えず得させたり。今宵、かかることと、声高にものも言はせず。いとはつらく見ゆれど、志はせむとす。

問　文章中から形容詞を五つ抜き出し、終止形で答えよ。

〈助動詞〉

【16】未然形接続の助動詞を全て記せ。

【17】連用形接続の助動詞を全て記せ。

【18】終止形接続の助動詞を全て記せ。

【19】体言か連体形に接続する助動詞を記せ。

【20】体言のみに接続する助動詞を記せ。

【21】サ変の未然形か四段の已然形に接続する助動詞を記せ。

【22】次の助動詞について、活用表を作成せよ。

き					
けり					

【23】「けり」の意味が「詠嘆」になるのはどんな時か、説明せよ。

【24】次の助動詞について、活用表を作成せよ。

つ	ぬ	たり	り

【25】「つ」と「ぬ」の意味が「強意」になるのは、どんな時か、説明せよ。

【26】「たり」と「り」の意味を二つ書け。

【27】次の文の傍線部の意味は「完了」である。どこで分かるのか、説明せよ。

会はでやみにし憂さを思ひ、

【28】次の助動詞について、活用表を作成せよ。

ず

【29】【28】の「ず」の活用表の中で、漢文では登場しない形はどれとどれか。

【30】次の助動詞について、活用表を作成せよ。

る					
らる					
す					
さす					

【31】「る」「らる」の意味を四つ書き、どういう時にどの意味になるのか、次の例文を参考にしながら説明せよ。

ふるさと思ひ出でらる。　　眠らんとして寝られず。

中宮仰せらる。　　舅にほめらる。

【32】「す」「さす」の意味を二つ書け。

【33】次の傍線部のうち、絶対に意味が「尊敬」にならないのはどれか。

～れ給ふ　～られ給ふ　～せ給ふ　～させ給ふ

【34】次の文章を現代語訳せよ。

大納言、文を読まる。日もすがらぞ読める。

【35】次の文章を読んで、問いに答えよ。但し、設問の都合上、本文を一部改変した箇所がある。

今は昔、紀貫之といふ歌詠みありけり。土佐守になりて、その国に下りてありけるほどに、任終われ（a）り。年七つ八つばかりありける男子の、形いつくしかり（b）ければ、いみじくかなしく思ひけるが、日ごろ患ひて、はかなくして失せ（c）にければ、貫之、限りなくこれを嘆き、泣き惑ひて、病付くばかり思ひこがれけるほどに、月ごろになりにければ、任は果てぬ。かくてのみあるべきことにもあら（d）ねば、「上り（e）なむ。」と言ふほどに、かの児のここにてとかく遊び（f）しことなど思ひ出で（g）られて、いみじく（A）かなしくおぼえければ、柱にかく書き付け（h）たり。

都へと思ふ心のわびしきはかへらぬ人のあればなり（i）けり

（『今昔物語集』）

問一　二重傍線部（a）～（i）の助動詞の意味を書け。

a	b	c	d	e	f	g	h	i

問二　傍線部（A）を現代語訳せよ。

【36】次の助動詞について、活用表を作成せよ。

む	らむ	けむ
○	○	○
○	○	○
○	○	○

【37】「む」の意味を六つ書け。

【38】次の助動詞について、活用表を作成せよ。

べし					○
じ	○	○			○
まじ					○

【39】「べし」の意味を六つ書け。

【40】「まじ」は「べし」の反対の語にあたる。「まじ」の意味を六つ書け。

【41】「じ」の意味を二つ書け。

【42】終止形接続の「なり」が「推定」になるのはどんな時か、次の例文を参考にしながら説明せよ。

秋の野に人まつ虫の声すなり。

【43】「めり」が「推定」になるのはどんな時か、次の例文を参考にしながら説明せよ。

かぐや姫、皮衣を見て言はく、「うるはしき皮なめり。」

【44】「らし」の意味を一つ書け。

【45】次の文を現代語訳せよ。

鏡に色あらましかば、映らざらまし。

【46】【45】のように、「まし」が「反実仮想」になるのはどんな時か、説明せよ。

【47】次の助動詞について、活用表を作成せよ。

たし	まほし
○	○

【48】次の「断定」の助動詞について、活用表を作成せよ。

なり	たり

【49】次の文章を読んで、A問いに答えよ。

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拝まざりけ[a]れば、心うく覚えて、ある時思ひ立ちて、ただひとり、徒歩より詣でけり。極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て帰りに[b]けり。

さて、かたへの人にあひて、「年ごろ思ひつること、果たし[c]侍りぬ[d]。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけ[e]れ。そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけ[f]む、ゆかしかりしか[g]ど、神へ参るこ[h]そ本意なれ[i]と思ひて、山までは見ず。」とぞ言ひける。

少しのことにも、先達はあらまほしき事なり。

問一　二重傍線部（a）〜（i）の助動詞の意味を書け。ただし、助動詞でない場合は×を記せ。

a	b	c	d	e	f	g	h	i

問二　傍線部Aを現代語訳せよ。

【50】傍線部の各単語を適当な活用形に直して接続せよ。
君がため（惜し）（ず）（き）命さへ長くもがなと思ひけるかな

〈助詞〉

【51】「の」の訳し方を五つ記せ。

【52】「の」の意味が「同格」になるのはどんな時か、次の例文を参考にしながら説明せよ。
白き鳥の、嘴と足と赤き、魚を食ふ。

【53】「未然形＋ば」の訳し方を記せ。

【54】「已然形＋ば」の訳し方を記せ。

【55】接続助詞「とも」「ど」「ども」はそれぞれ何形に接続するか記せ。

【56】副助詞「だに」「すら」「さへ」の訳をそれぞれ記せ。

【57】次の文を、係助詞に注意しながら現代語訳せよ。
雨こそ降れ。

【58】次の文を、係助詞に注意しながら現代語訳せよ。
雨や降る。

【59】次の文を、係助詞に注意しながら現代語訳せよ。
雨こそ降れ、行く。

【60】次の文の結びについて説明せよ。
犬の飛びつきたりけるとぞ。

【61】次の文の結びについて説明せよ。
大納言、知られざりけるにや。

【62】次の文の結びについて説明せよ。
たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなどか生きざらむ。

【63】次の文を、係助詞に注意しながら現代語訳せよ。
雨もぞ降る。

〈副詞〉

【64】「さらに～ず」の現代語訳を記せ。

【65】「すべて～ず」の現代語訳を記せ。

【66】「おほかた～ず」の現代語訳を記せ。

【67】「え～ず」の現代語訳を記せ。

【68】「な～そ」の現代語訳を記せ。

【69】「いかで～ばや」の現代語訳を記せ。

【70】次の文を読んで後の問いに答えよ。但し、設問の都合により、本文を一部省略・改変したところがある。

高倉院の法華堂の三昧僧、なにがしの律師とかやいふもの、ある時、鏡を取りて顔をつくづくと見て、①我がかたちのみにくく、あさましき事を余りに心憂く覚えて、鏡さへうとましき心地しければ、その後長く鏡を恐れて②手にだに取らず、さらに人に交はる事なし。御堂のつとめばかりにあひて、籠り居たりと聞き侍りしこそ、ありがたく覚え（き）。

賢げなる人も、人の上をのみはかりて、己をば③知らざるなり。我を知らずして、外を知るといふ理あるべからず。されば、己を知るを、物知れる人と言ふべし。かたち（みにくし）ども知らず、心の愚かなるをも知らず、芸の拙きをも知らず、数ならぬをも知らず、年の④老いぬるをも知らず、病の冒すをも知らず、死の⑤近き事をも知らず、行ふ道の至らざるをも知らず。身の上の非を知らねば、まして外のそしりをしらず。但し、かたちは鏡に見ゆ。年は数へて知る。我が身の事知らぬにはあらねど、すべき方のなければ、知らぬに似たりとぞいはまし。

かたちを改め、齢を若くせよとにはあらず。行ひ愚かなりと知らば、などこれを思ふことこれにあら⑦（ず）。

（徒然草第百三十四段）

問一　傍線部①について、

（1）「だに」と同じ種類の助詞を、本文中から三つ抜き出し、解答欄に記せ。

（2）傍線部①を口語訳せよ。

問二　傍線部②③⑦の語を適当な形に活用せよ。

問三　傍線部④⑤⑥の助詞の種類を記せ。

問一		問二	問三
1	2	②	④
		③	⑤
		⑦	⑥

〈敬語〉

（ちょっと説明）

敬語の出題形式は、**「誰から誰への敬意を表す敬語か」**か**「敬語の種類を記せ」**かが殆ど。これに答えるためには、敬語動詞を敬語の種類と共に覚える必要がある。

【71】「誰から」について、その敬語動詞が

地の文にある　→（　　）から

会話文中にある　→（　　）から

【72】「誰へ」について、その敬語動詞が

尊敬語　→（　　）へ　　丁寧語（地の文）　→（　　）へ

謙譲語　→（　　）へ　　丁寧語（会話文中）→（　　）へ

【73】　次の敬語表について、

（1）「普通語」の行の空欄に入る語を、左の語群からそれぞれ一つずつ選び、表に書き込め。

〈「普通語」の語群〉

与ふ・授く	あり・をり	行く・来	言ふ	受く
食ふ・飲む	仕ふ	寝・寝ぬ		

（2）「古語」の行の空欄に入る語を左の語群からそれぞれ〇の中の数だけ選び、表に書き込め。但し、同じ語を何度使っても良い。

〈「古語」の語群〉

いますがり	承る	おはします	おはす	仰す	大殿ごもる	
聞こしめす	聞こす	聞こゆ	啓す	候ふ	奏す	奉る
給はる	給ふ	のたまふ	侍り	申す	まうづ	まかづ
まゐらす	まゐる	召す				

給はす　まかる

種類	普通語	古語	現代語訳
尊敬語		③	いらっしゃる
		②	いらっしゃる
		②	おっしゃる
		②	お聞きになる
		②	お与えになる
		④	召し上がる
		①	お休みになる
		④	お～になる ～なさる
謙譲語		②	お仕えする
		④	参上する
		④	申し上げる
		①	お聞きする
		③	差し上げる
		①	いただく
		⑤	～申し上げる
丁寧語		②	あります おります
		②	～です ～ます

（補助動詞）

【74】 次の各文の傍線部の敬語が、尊敬語の場合には「尊」、謙譲語の場合には「謙」と傍線の右に記せ。

・（匂宮は）法性寺のほどまでは御車にて、それよりぞ御馬には奉りける。

・まさつら、（前土佐守様に）酒、よきもの、奉れり。

・内々に、思ひ給ふるさまを奏し給へ。

【75】 傍線部について、誰から誰への敬意を表す敬語か、左の語群を用いて答えよ。

〈語群〉

大斎院	上東門院	紫式部	源氏	作者	読者	話し手	聞き手

「大斎院より上東門院へ、『つれづれ慰みぬべき物語や①侍る。』と尋ね②参らせさせ③給へりけるに、（上東門院が）紫式部を④召して、『何をか⑤参らすべき。』と⑥仰せられければ、『珍しきものは何か⑦侍るべき。新しく作りて⑧参らせ⑨たまへかし。』と⑩申しければ、『作れ。』と⑪仰せられけるを、⑫承りて、源氏を作りたりけるとこそ、いみじくめでたく⑬侍れ。」と言ふ人⑭侍れば、…

（『無名草子』）

① ↓	② ↓	③ ↓	④ ↓
⑤ ↓	⑥ ↓	⑦ ↓	⑧ ↓
⑨ ↓	⑩ ↓	⑪ ↓	⑫ ↓
⑬ ↓	⑭ ↓		

〈識別〉

【76】枠囲みの説明として適当なものを、左の語群の中からそれぞれ一つずつ選べ。

〈る・れ〉

1　今日は都のみ思ひ遣らる。　　2　み吉野の山べに咲ける桜花

3　秋風に吹かれて赤し鳥の脚　　4　大将、福原へこそ帰られけれ。

5　抜かむとするに、おほかた抜かれず。　　6　吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風を嵐と言ふらむ

a　完了の助動詞　b　動詞の活用語尾の一部　c　自発の助動詞　d　可能の助動詞　e　受身の助動詞　f　尊敬の助動詞

【77】枠囲みの説明として適当なものを、左の語群の中からそれぞれ一つずつ選べ。

〈なむ〉

1　来む世には虫にも鳥にも我はなりなむ。　　2　春立てば消ゆる氷の残りなく君が心は我に解けなむ

3　願はくは花の下にて春死なむその如月の望月のころ　　4　「来む世には虫にも鳥にも我はなりなむ。」となむ。

a　強意の助動詞＋意志の助動詞　b　係助詞　c　終助詞　d　ナ変動詞の活用語尾＋意志の助動詞

【78】枠囲みの説明として適当なものを、左の語群の中からそれぞれ一つずつ選べ。

〈ぬ・ね〉

1　眼に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、　　2　山里は冬ぞ寂しさまさりける人目も草もかれぬと思へば

3　昔の直衣姿こそ忘られね。　　4　具して率ておはしね。

a　打消の助動詞　b　完了の助動詞

【79】枠囲みの説明として適当なものを、左の語群の中からそれぞれ一つずつ選べ。

〈らむ〉

1　万にいみじくとも、色好まざらむ男はいとさうざうし。
2　丑にや成りぬらむ。
3　思はむ子を法師になしたらむこそ、心苦しけれ。
4　あたら夜の月と花とを同じくは心知れらむ人に見せばや

a　完了の助動詞＋推量の助動詞　b　現在推量の助動詞　c　助動詞の一部＋推量の助動詞

【80】枠囲みの説明として適当なものを、左の語群の中からそれぞれ一つずつ選べ。

〈なり〉

1　春になり、花が咲く。
2　中宮、いとあてなり。
3　夢にも人に会はぬなり。
4　夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里
5　物語の多くあんなり。いかで見ばや。

a　断定の助動詞　b　伝聞の助動詞　c　動詞　d　推定の助動詞　e　形容動詞の活用語尾

【81】枠囲みの説明として適当なものを、左の語群の中からそれぞれ一つずつ選べ。

〈に〉

1　おのが身はこの国の人にしもあらず。
2　会はでやみにし憂さを思ふ。
3　琴の音のほのかに聞こゆる。
4　丹波に出雲といふ所あり。
5　抜かんとするに、おほかた抜かれず。
6　三十六計逃ぐるに及くはなし。

a　完了の助動詞　b　断定の助動詞　c　格助詞　d　接続助詞　e　形容動詞の活用語尾

【82】枠囲みの説明として適当なものを、左の語群の中からそれぞれ一つずつ選べ。

〈にて〉

1　われ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。

2　月の都の人にて、父母あり。

3　ただひとりいとささやかにて臥したり。

4　去年の春逢へりし君に恋ひにてし。

a　断定の助動詞＋接続助詞　b　格助詞　c　形容動詞の活用語尾＋接続助詞　d　完了の助動詞＋完了の助動詞

【83】枠囲みの説明として適当なものを、左の語群の中からそれぞれ一つずつ選べ。

〈して〉

1　岩に指の血して書きつけける。

2　いかにもして君に文を奉らばや。

3　都近くなりぬる喜びに耐へずして、言へるなり。

a　格助詞　b　接続助詞　c　サ変動詞＋接続助詞

【84】枠囲みの説明として適当なものを、左の語群の中からそれぞれ一つずつ選べ。

〈し〉

1　例のことどもしける。

2　昨日こそ早苗とりしかいつの間に稲葉そよぎて秋風の吹く

3　会はでやみにし憂さを思ふ。

4　おのが身はこの国の人にしもあらず。

a　過去の助動詞　b　過去の助動詞の一部　c　副助詞　d　サ変動詞

【85】枠囲みの説明として適当なものを、左の語群の中からそれぞれ一つずつ選べ。

〈ばや〉

1　いかにもして君に文を奉らばや。　　2　思ひつつ寝ればや人の見えつらむ

3　八千夜し寝ばや飽く時のあらむ。

a　終助詞　b　順接仮定条件の接続助詞＋係助詞　c　順接確定条件の接続助詞＋係助詞

【86】枠囲みの説明として適当なものを、左の語群の中からそれぞれ一つずつ選べ。

〈けれ〉

1　かひなく立たむ名こそ惜しけれ。　　2　かひなく立たむ名こそ惜しかりけれ。

a　過去の助動詞　b　シク活用形容詞の活用語尾

〈現代語訳の練習〉

【87】（平氏の一類にて）かやうの善事をなしけるにや。

【88】この姫を、さしもなからんずる下衆に盗ませばや。

【89】いつしか梅咲かなむ。

【90】秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる。

【91】いかで心として死にもしがな。

【92】抜かんとするに、おほかた抜かれず。

【93】思はん子を法師になしたらむこそ心苦しけれ。

【94】男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。

【95】夢と知りせば覚めざらましを。

【96】雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆ。

【97】たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなどか生きざらん。

【98】橋の跡だになければ、舟にて渡る。

【99】君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな

〈和歌〉

【100】 次の八首の和歌を読んで、後の問いに答えよ。なお、A～Cが『万葉集』、D～Eが『古今和歌集』、F～Hが『新古今和歌集』の歌である。

A　□夜渡る月をおもしろみ我が居る袖に露ぞおき（けり）

B　夏の野の繁みに咲ける姫百合（ひめゆり）の知らえぬ恋はくるしきものぞ

C　吾妹子（わぎもこ）が如何（いか）に思へか□一夜もおちず夢にし見ゆる

D　涙河（なみだがわ）枕流るるうきねには夢もさだかに見えずぞ有り（けり）

E　五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

F　橘のにほふあたりのうたたねは夢も昔の袖の香ぞする

G　駒とめて袖打ちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮

H　我が宿の物なりながら桜花散るをばえこそとどめざり（けり）

問一　A・Cの和歌の［　　］に共通して入る語として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、符号で書け。

ア　ひさかたの　　イ　ちはやぶる

ウ　ぬばたまの　　エ　あをによし

［　　］

問二　Bの和歌の傍線部は、「人に知られることのない恋」という意味であるが、Bの和歌中にはもう一つ「人に知られることのない」ものが詠まれている。それは何か、一語で記せ。

［　　］

問三　A・D・Hの和歌の「けり」を、係り結びの法則に注意して、適切な形に活用せよ。

A	D	H

問四　Dの和歌の傍線部は、「浮き寝（水に浮いて寝ること）」という意味と「憂き寝（辛い思いをして寝ること）」という意味の両方を表している。このような修辞技法を何というか、漢字二字で答えよ。

［　　］

問五　次の①～③は、和歌の鑑賞文である。それぞれどの和歌についてのものか、A～Hの符号で書け。

①　他のものが全くないと詠むことで、一面一色になっている野の風景を見事に描き出している和歌である。

②　この和歌は、Eの和歌の表現（＝橘の花の香りで昔なじみの人を思う）を踏まえて作られている。このような和歌の作り方を「本歌取り」と言う。

③　当時は、「自分が好きだから相手の夢を見る」という考え方とともに、「相手が自分を好きでいてくれると、自分の夢にその人が出てくる」という考え方もあった。この和歌は、後者の考え方に基づく和歌である。

①	②	③